

昭和57年7月1日 第1000号発行
平成19年8月1日発行 第1114号 1500円
俳句雑誌 沖 第1000号記念号



俳句雑誌「おき」

8月号

沖
発行所

蟲惑

能村 研三

私の周りの地貌季語

鉄血といふ語をおもふ西日中

赤味帯ぶ灼くる舗装路切る音に

うる覚えの第二体操雲暑し

遠青嶺アルプホルンの響みかな

毎月、「沖」の選句の他にいくつ
か俳句欄の選をしているが、特に朝
日新聞の千葉版の俳壇と、金沢に
ある北國新聞の俳壇の選については、
地域的な貌とでもいうべきものを意
識しながら選句している。地域なら
ではのお祭、特産、風習など。千葉
県は私の出身地ではあるものの、東
京に一番近い市川で生まれ育ってい
るので、千葉県全体のことには判らな
いことが多く、かつて千葉・ふるさ
と文化研究会というところから刊行
された『房総ふるさと歳時記』を参
考書にして千葉県各地のことを勉強
している。また時間のある時は千葉
県の各地を散策しいろいろな風物に
触れる機会を作ろうとしている。夏
に行われる船橋の「バカ面踊り」や
かつて見にいったことのある南房総
の白浜で行われる海女の大夜泳（か
がり火に海女たちが遊泳）など。ま
た俳人協会から出ている『房総吟行
案内』なども参考になる。

「北國新聞」の選についても、投
稿者の句を出来る限り理解するため
石川県、富山県のは常に勉強する
ように心がけているが、こちらに
ついては同新聞社から出ている『ふ

自 転 車 の 空 気 が あ ま き 朝 曇 り

カ ン カ ン 帽 網 棚 に 載 せ 深 眠 り

蠱^こ 惑^わ 感^く なる 島 の 岬 の 夏 霞

日 焼 け せ る 島 民 の 顔 誰 も 似 て

鞆 より 鞆 を 出 し て 晚 夏 か な

キ ャ プ シ ョ ン に 「 無 題 」 と あ り て 夏 惜 し む

るさと石川歴史館』『ふるさと富山歴史館』という分厚い辞典を片手に勉強している。ただ、こちらの方はその度出かけて直接確かめることが出来ないが、この地域の方々の俳句の選をするからには、できる限り足を運んでこの目で確かめたいと思っている。

先般、読売文学賞を受賞された宮坂静生さんの『語りかける季語・ゆるやかな日本』という本は、日本各地のそれぞれの貌をもつ地貌季語を採り上げたものだが、私たちの周りにも俳人にとって必要なことであるように思う。

能村 研三



黴の書

林 翔

ナイターの句

考^ちの署名ありて宝や黴の書も

梅雨の河渡り了へても茫茫たり

大枝が小枝をかばひ梅雨しとど

その翅の何時きらめくや梅雨の蝶

テレビで野球を観ていて、ふと、ランナー走り投手の面を汗走り

という句が瞬発的に浮かんだが、テレビ俳句では作品として発表するわけにはいかない。その時ふと、初めて野球を句に詠んだ秋櫻子のことを思い出した。秋櫻子自身も学生時代は野球部の選手で、キャッチャーだったという。なるほど、あの体格はキャッチャー向きだろう。

秋櫻子第十七句集『殉教』には、ナイターのやふれかふれや稲びかり
ナイターの光芒飛べる法師蟬
ナイターのいみじき奇蹟現じけり
等の句があるが、右の第三句では、ナイターを夏の季語として、他の季語を加えていない。

講談社の『日本大歳時記』（昭和57年刊）で「ナイター」の項を見ると、解説文は秋櫻子が書いていた。それによると「ナイター」は和製英語で、本場のアメリカでは通用しな

逃げられたり蠅にもありし第六感

画家逝けり画中の裸婦は生氣溢れ

森見れば雨の條すぢ見え半夏生

「こんにちは」「はあい」それぞれ簾越し

猫愛めし干す雨傘を日傘とし

花火に満腹夜空しづかに暁あけを待つ

い由。例句としては、

ナイターの光芒大河へだてけり

水原秋櫻子

ナイターに見る夜の土不思議な土

山口 誓子

遠空にナイター明り亀乾く

秋元不死男

ナイターの投手最も照らさるる

榎本冬一郎

ほか六句が挙げられている。

同じく講談社刊の『新日本大歳時

記』（平成12年刊）には、

衿にもらひぬナイターに舞ふ紙吹雪

田川飛旅子

ほか五句が挙げられていた。

林 翔



蒼茫集



はつたい

小山田 子鬼

絆

松井のぶ

はつたいやむかしにかへす舌の先
永き日の欠伸は涙出づるまで
虫干に清貧といふ匂ひあり
生も死も知り尽したる白緋
葬列の背後に蹤ける氷菓売
殺戮の絶えざる星のさくらんぼ

大雨や青田どうしの絆生る
声あらば聞かま欲しきを水馬
つながつて人寄せつけぬ蟻の道
燃えつきる月下美人の香に酔へり
蚊遣香腰に庭師のふりをし
緑蔭の冷に寄りそふ飢餓羅漢

田を植うる

辻 美奈子

夏ごろも

湯橋 喜美

田を植うるあしゆび開くだけひらき
早苗饗ののちおほどかに艶話
赤ん坊は火種のごとし青葉冷
ワイナリー出て初夏の光浴ぶ
かたつむり水ひとつぶを産みてをり
梅雨晴間ぼむとこどもの傘ひらく

夏蝶のもつれ吾にて果つる姓
差し出しにゆく相続税梅雨深し
南瓜煮て旅あとの常取りもどす
紵糸の透け御僧の夏ごろも
凌霄の命粗末に落ちつげり
風鈴の尾の曲りぐせ風のくせ

賓 客 秋葉雅治

身捨つるほど波に傾がせヨツトの帆
招き入るる風の賓客まろうど夏座敷
畳まれしまま青蚊帳も歲月も
陶枕に臥して三峽くだる夢
色白の昭和遙けし黒日傘
王子にはなれず少年汗ぬぐふ

撥音便 千田 敬

時の日の漏刻に似て独り酌む
あめんぼう撥音便に跳んでとんで
勾玉を磨く瀬に和し河鹿笛
父の日の窓に垂れをる繩梯子
旅をきて車田涼し飛驒の里
緑さす縄目にしのぶ結ゆいの知恵

雲海の沖 北川英子

海風へ首夏のハンドル大きく切る
麦秋の没日じりじり勾ひけり

蓮開く音かも暁けの棹とどめ
雲海の沖の茜へ一舟欲し
日も風も力ゆるめず浜昼顔
牡丹鱧崩すにしのびなく崩す

巴里祭 坂本俊子

かんかん帽昔の映画みてきたる
淡海の見えるところに梅を干す
ごはん炊ける匂ひしてきし巴里祭
代々の銚に仕へて歳とれり
急がずに大人になれよ雀の子
父の日や父に戦の過去ありし

土用あい 松本圭司

縞馬のかしこい縞や土用あい
少年の恐るるものなき裸
羅のうつくしき嘘うべなへり
悪女とはなれず白玉まるめぬる
螢火のいましも獅子座流星群
十葉の白さを闇が研ぎ澄ます

潮鳴集



青信号

栗原 公子

全力のつもり私とかたつむり
初夏の略図川より書きはじむ
夏来る青信号を駆けぬけて
大夕焼奏づるやうにハープ橋
白薔薇万年筆の水あらひ

迷子

服部 早苗

ラムネ瓶もたされてゐる迷子かな
夏めくや知育玩具の木の匂
あぢさゐや切手の端の色見本
鏡面のビルに雲ゆく薄暑かな
風薫る箒ひちり策りきにある竹冠

水糸くぼ

富川 明子

滴りのひとしづく欲しもの忘れ
あめんぼに風の重さや水糸くぼ
矢車の全開空の痛さうな
かはせみの凝視の先のいのちかな
梅蕙耳遠くゐるやすらぎも

行々子

高橋あさの

重心の危ふき咲きやう立葵
囃すとも帰路急かすとも行々子
むんむんと茂りの古墳高曇り
水無月の櫻ふくらむ月夜かな
羽抜鳥胸張ることは忘れざり

沖作品



能村研三選

あたたかや祖父書き上げし紀行文

長崎

小林 奈穂

この町に慣れこの町の花菜風
館パンの館が重たし労働祭
温暖化少子化泳げ鯉のぼり
鉄線花楽することは考へず

みちのくの青の量感五月来る

千葉

篠藤千佳子

なめくぢりゆつくりといふ清しさよ
ゆふぐれの裏は銀色夏つばめ
たんぼぼの絮この町に住みなれて
しんがりの気楽さ青き踏んでゆく
遠浅に素足よろこぶゆりかもめ
緑蔭の船底に似て仰ぎゆく
万緑や黒光りする大腿筋
夕薄暑電源切れてより独り
ふいに父のポマーードの香や青時雨

東京

小嶋 洋子

小流れに田の神祀り青嶺村

茨城

内山 花葉

出陣めく五月幟の峡一村
激流に鱭ふり小鮎上りゆく
皮脱ぎし竹の直幹くもりをり
太陽に影うばはれて蟻走る

帆はらむは夏待つ風の力かな

長崎

橋口 桂子

さざ波に昼月皺む水張り田
水張つて雲のはみ出す巾着田
梅雨の坂幾度訪はば母癒えむ
シヤワー全開哭きたき時の泣き処
雨煙る銀座が好きよ更衣
万緑や岬に詠み人知らずの碑
夜の蜘蛛ハープ奏つること待てり
古伊万里の藍の濃淡夏きざす

東京

七種 年男

沖作品 15句選評

*
能村研三

温暖化少子化泳げ鯉のぼり 小林 奈穂

鯉のぼりのルーツは中国。黄河の奔流に乗った鯉はやがて天に至り龍に変じるといふ話から来た。奔流を泳ぎきり天に至る、その勇壮の姿に男児の将来の飛躍を願う気持ちを感じた。真っ青な五月晴れの空をゆうゆうと泳ぐ鯉のぼりは見えていても気持ちが良い。しかし現代の地球上では、いろいろ由々しき問題が起きていく。温暖化と少子化。温暖化がこのまま続くと、あと何年後には真夏日が二百日続いたり、少子化もこのまま続くと百年後には日本の人口が極端に減少するとか。せめて未来あるこれからの子どもたちには、明るい世の中であってほしいという切なる願いが「泳げ」という命令的な語調となった。

みちのくの青の量感 五月来る 篠藤千佳子

みちのくは長い間、雪に閉ざされ春の訪れは遅い。みちのくは場所によっては暦のうえの立春も深い雪の中にある。寒さが

ゆるみ、日増しに暖かくなると、雪は上と下から解けだしてくる。雪の下に隠れて見えなかった川筋が、雪解け水でふくらみ勢い良く流れてゆく。待ちに待った春がやってくる。野辺や日だまりの土手に、顔を出した露の臺などに春を見つけ、ホッとする。やがて、梅、桜、桃、梨の花が一斉に咲き出す。さらに山の木々が若芽を吹き、緑の衣をつけはじめる。山が一面新緑におおわれる。五月になると、農村では最も忙しい田植えがやってくる。この句は「みちのくの青」とやや曖昧な詠み方をしているが、「量感」という言葉がいかに実感感を踏まえている。

万緑や黒光りする大腿筋 小嶋 洋子

スポーツをする若者の姿であろうか。大腿筋は大腿部にある筋肉のことを言う。大腿部を鍛えるために、ランニングやダッシュ、ジャンプ系のトレーニングを行なうのが効果的である。ここでは何のスポーツか具体的にはわからないが、万緑を背景にした野外スポーツであることは間違いない。「黒光りする」と言うから、日焼けをしてよほど鍛えあげた肉体なのだろう。

出陣めく五月幟の峡一村 内山 花葉

端午の節句を祝う鯉のぼりは、本来武家出陣の際に用いる幟を起源とした。元寇の勝ち戦が五月五日、足利尊氏の天下統一の日が同じ五月五日だったので、武家社会で幟を立てるようになったという説もある。最初はそれぞれの定紋の入った幟を馬印、長刀とともに戸外に立てたのが始まりで、これが「外ノボリ」であった。峡の村にはためく幟はまるで戦国時代を思わせるほどであった。

(以下略)